



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	新中国の武松たち : 「虎退治」の物語を読む
Author(s)	加部, 勇一郎
Citation	連環画研究, 10, 64-85
Issue Date	2021-09-30
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98494
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98494
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_10_64-85.pdf



新中国の武松たち——「虎退治」の物語を読む

加部 勇一郎

1962年の「虎退治」

1962年の中国で作られたアニメーションに『没頭脳和不高興』（ノータリンとヤナコッタ、セルアニメ、張松林監督）がある¹（図1）。主人公は「没頭脳」と「不高興」という二人の子ども。「没頭脳」はその名の通り、なにかにつけて考えが足りない。「不高興」はなにかにつけてヤダヤダと不満げに振るまう。そんな二人にナレーションが、「今からそんなじゃ、大人になってから大変だよ」と言って、試しに二人を大人に変えてしまう。



図1 アニメーション『没頭脳和不高興』

大人になった二人は、子どもの頃の夢をかなえ、「没頭脳」は設計士になり、「不高興」は俳優になる。だが子どもの頃の性質は変わらず、「没頭脳」はエレベーターのない999階建てのビルを作り、「不高興」は舞台の上でわがままを言って共演者を困らせる。最後、ダメな性質は子どものうちに改めましょうといった教訓を含みながら、物語は幕を閉じることとなる。

これは任溶溶（じんようよう）（1923-）の同名童話（1956）を上海美術電影製片廠がアニメーションにしたもので、中国では広く知られた作品である。つい先ごろにも、リメイク作品が作られ、また有名ブランドがTシャツを売り出したりしている。ことばもストーリーもシンプルなので、筆者は仲間と字幕をつけて、日本の大学で授業の合間に見せたりしていた。学生たちは、展開のゆったりとした、刺激の薄い児童向けアニメを、ほほえましく眺めながら、50年以上も前の中国の作品の、その完成度の高さに驚き、良質なユーモアにニヤリとしていた。映像表現に興味のある学生は、ナレーションが登場人物に語り掛ける「語り」に注目し、あるいは伸び縮みする輪郭線の自由さと、それらとマッチした効果音を面白がっていた。

1962年と言えば、「大躍進」に続く「三年の大飢饉」の直後であり、また文化大革命まであと数年といった時期でもある。そんな中、このようなチャーミングなアニメーションが

作られたあたり、1960年代の「わからなさ」に呆然とするばかりであるが、とりあえず目に留まるのは随所に織り込まれたその「社会主義中国らしい」成分であろう。例えば、子どもたちの出で立ち。みな人民服を着て、男女の区別はあるものの、みな同じ顔で、ほとんど個性といったものがない（図2）。問題を起こす「没頭脳」と「不高興」だけが特徴ある外見で、むろんそうしてこそ作品が見やすくなるという側面もあるだろう。もう一つは、子どもたちがみな同じ顔のみならず、同じ動きをするといったあたり²。エレベーターのない高層ビルの階段を、幾多の子どもたちが黙々とロボットのように登るさま（図3）は、人民が一丸となって一つの目的に向かう「社会主義中国」を、まるで揶揄しているかのようすら見えるのだが、これを1962年当時、アニメーターたちが自画像のように用いているあたり、ますます「わからなさ」が増してくるのである。

「わからなさ」ゆえか、何度見ても発見の尽きない作品でもあるわけだが、筆者の目下の興味は、高層ビルの最上階の舞台上上演される京劇「武松打虎」（武松の虎退治）にある。「武松打虎」は、『水滸伝』に材を取る演目で、武松なる豪傑が、夕暮れ時、ある山中で一匹の虎と対峙し、死闘の末に素手で仕留めるというおはなし。語り物や京劇で頻繁に演じられる有名な演目であるから、中国では知らない人がいないほどの「常識」とも言える。『没頭脳和不高興』では、「不高興」が虎の役をあてがわれ、しかしなににつけ「不高興」なものだから、やっつけられる役なんてヤナコッタ！ と、あべこべに武松をぶちのめそうとする（図4）。このせいで舞台はめちゃくちゃとなり、観客の子どもたちは、予想外の展開に目を丸くしながら（図5）、しかし固唾を飲んで成り行きを見守るのであった。

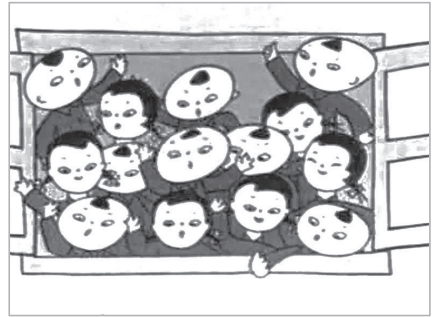


図2 個性のない子どもたち

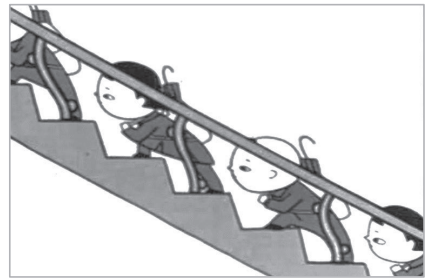


図3 ロボットのような子どもたち

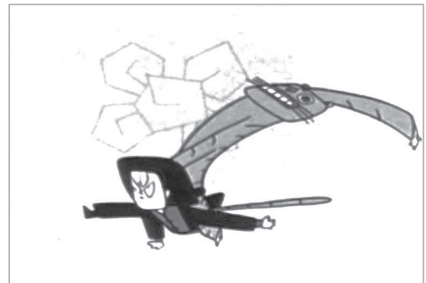


図4 虎の武松退治？

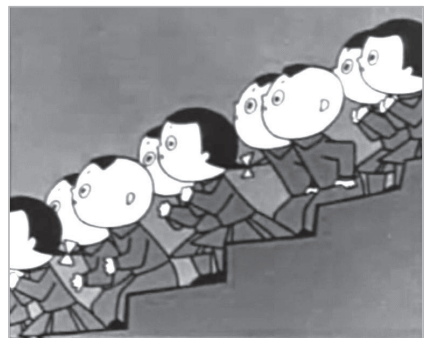


図5 目を丸くする子どもたち

なぜこの場面に「武松打虎」が使われているのか。いままでこのアニメーションを見た人で、そんな疑問を抱いた人はいなかったかもしれない。しかし以下に見るように、当時「虎退治」には、特別な意味があったのだった。

本稿では、新中国が建国してからのち、1980年代くらいまでに、さまざまに現れる「虎退治」の物語について、主に児童向けメディアを用いながら、眺めてゆきたい。当時において「虎退治」とは、いったいなにを意味していたのか。またどのような物語と図像が生み出されたのか。それはまた、古くからある「虎退治」のモチーフが、社会主義中国において、どのように展開および変容していったかを眺める試みとなることだろう。

武松の虎退治について

本稿の基調を成す「武松打虎」の物語について、少し述べておこう。これは『水滸伝』第23回に由来し、武松という偉丈夫が、山東は陽谷県けいようこうの景陽岡にて、一匹の虎と対峙し、それを素手で殴り殺す、という物語である。講談などでは、前半に、彼が立ち寄った酒屋で、大量の酒を飲むさまが語られる。

本稿においてはとくに、この話が、誰にいつ、どのように図像化されたのか、という点が重要だろう。新中国以降のものとしては、画家の劉継卣りゅうけいゆう（1918-1983）による連環画作品が特筆される。劉はこの題材で幾度か作品をものしている³が、右にあげた図6は、1957年の人民美術出版社からのもの。まさに武松が虎の背に乗り、左手で虎の頭を押さえつけ、右手のゲンコで虎の眉間を殴りつけようという場面である。この版は全16コマ、各画幅に七言絶句が配されたものだ。

そもそもなぜ劉がこの題材を書こうとしたか。彼は1952年の『連環画報』第38期（1952.12.16）に全28コマのものを発表している（図7）。このバージョンは大変に素朴で、1957年のものと比べると芸術性といった点では劣るものだが、冒頭に毛沢東の「人民民主主義独裁を論ず（論人民民主専制）」からのことば「獣に向かい合っても、少しの恐れる様子も見せてはならない。私たちは景陽岡の武松に学ばねばならない」が置かれ、この連環画が作られるに至った意図がわかる



図6 劉継卣「武松打虎」（連環画、1957）



図7 劉継卣「武松打虎」（連環画、1952）

ようになっている。「人民民主主義独裁を論ず」は1949年6月に発表されたが、この段階ですでに武松の名が「学ぶべきもの」として出ていることは、新中国の虎退治を考えるうえで重要であるから、ここで記しておきたい。

なお、画家の金雪塵（1904-1996）にも同題材の油絵があり、両者の影響関係は不明ながら、参照のために並べておく（図8）。この絵は上空に丸い月が描かれることで、少しロマンチックな雰囲気が醸し出されているようだ⁴。



図8 金雪塵「武松打虎」（油絵、1955）

張り子の虎とその図像化

上で、劉継卣の1952年の「武松打虎」の連環画が、1949年の毛沢東のことはもとに作られたことを述べたが、彼は獣すなわち虎じたいについても発言を残している。彼は社会主義国家建設における敵を、大きく二回、「紙老虎」（張り子の虎）なることばで表現しているのだ。一度目は、1946年8月6日、アメリカ人ジャーナリスト、アンナ・ルイス・ストロングとの談話の中での発言と言われる。

すべての反動派は張り子の虎である。反動派は見たところ恐ろしいが、実際には大した力はない。長い目で見れば、本当に強大な力をもっているのは、反動派ではなく人民である。⁵

反動派、と言っているのは、共産主義に反対する勢力のこと。そして二度目は、1958年12月1日に行われた第8期中央委員会第6回全体会議上で発表した文章「帝国主義とすべての反動派は張り子の虎かどうかという問題について」中のことばである。

本質的、また長期的、戦略的に見て、帝国主義とすべての反動派は、ありのままに張り子の虎とみなさなければならない。この点からわれわれの戦略的思想を建設する。⁶

帝国主義は、アメリカを筆頭とする資本主義陣営を指している。そして、これらのことばをきっかけに、宣伝画や年画などのさまざまなメディアにおいて、「敵」や「困難」のビジュアルとして、「紙老虎」が採用されるようになり、バリエーション豊かに描かれていった。

いくつか例を見ていこう。図9は「美帝紙老虎越戳越穿了」（アメリカ帝国主義たる張り子の虎は、徐々に馬脚を露わにしている、1951）という宣伝画であるが、強そうな外面がじつは張りぼてであることを描いたものだ。共産圏側の人民の持つプラカードには「我們要和平：我們反对侵略戦争」（我々は平和を求める：我々は侵略戦争に反対している）と書かれている。虎の額にはナチスをあらわす逆さ「卐」が記され、右耳にはミサイル、左耳は\$マークが配置される。傾いた机に敷かれた星条旗の上に置かれた地図らしき戦略図は、朝鮮半島を描いたものだろう。上部背後に見える建物は、効果線により「輝いて」いるが、左はソ連風、右は中国風で、ここには「美帝」に対抗する中ソの連帯が示されている。



図9 美帝紙老虎越戳越穿了（1951）

図10は尚世順「揭穿美帝紙老虎——娃娃戲」（アメリカ帝国主義の張り子の虎を暴露する、1951）というもの。「娃娃戲」は「子どもの遊び」のこと。

直前の1948年に、馮真（1931-）が描いた年画「娃娃戲」（図11）と意趣を同じくするが、その表現には若干の違いが見られる。比べながら見てみることにしよう。

馮の絵では、蒋介石の面をつけ、逆さ「卐」の柄のズボンを履いた少年が「台湾」役で、つけ鼻とシルクハット、飛行機を手にした少年が「アメリカ」役だ。一方、尚の絵は「台湾」役がいなくなり、「アメリカ」役の少年は膝を折って坐り、さらに虎の皮をかぶっている。このあたり、アメリカを虎に喩える作法の影響がみられる。彼の足元の丸い毬のようなものには、「原子弾」（原子爆弾）の文字がある。左側の子ども二人が「鎌と槌」（農民と労働者の団結をあらわす標章）を象り、赤い布



図10 尚世順「揭穿美帝紙老虎——娃娃戲」（1951）



図11 馮真「娃娃戲」（年画、1948）

を絡ませているあたり、彼らが共産圏の側にいることを明示している。「鎌と槌」は旧ソビエト連邦の国旗に配されていたマークでもある。

上に 1958 年の毛沢東のことばを紹介したが、その直後に、児童向け雑誌『児童時代』では、「去看紙老虎」（張り子の虎を見に行こう）という記事が掲載された（図 12）。イタリアのムッソリーニ、ドイツのヒトラー、日本の東条英機、そしてアメリカのマッカーサーが、張り子の虎とともに陳列されている。

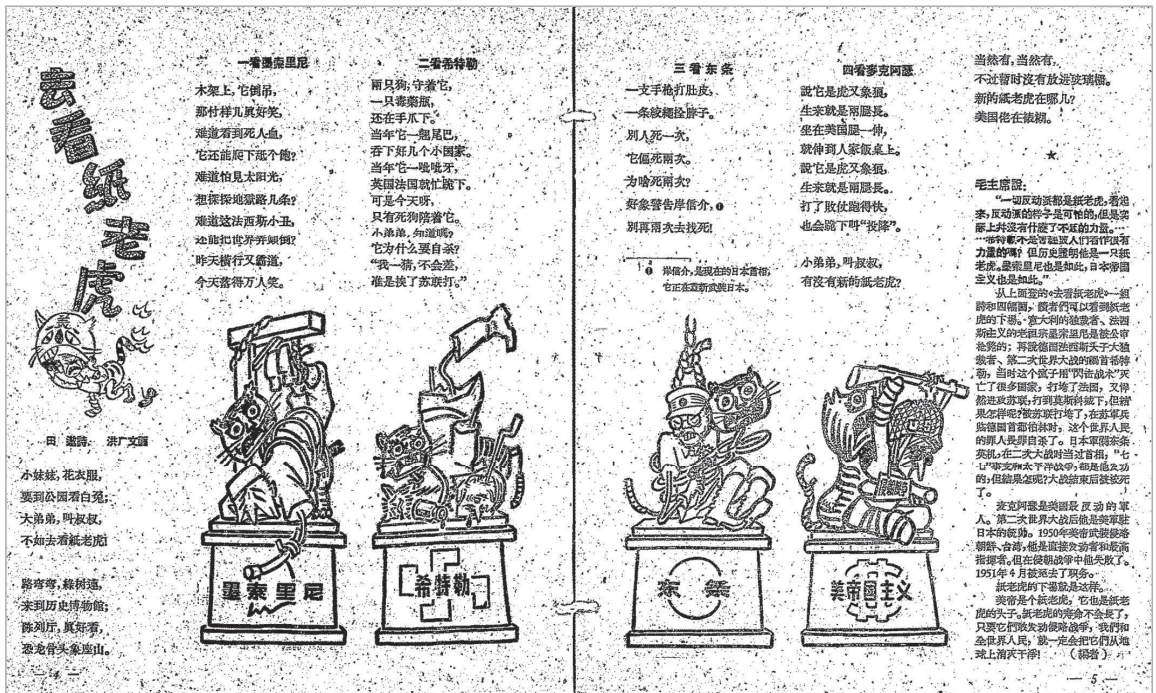


図 12 『児童時代』205 期 (1958.12.16) より

枢軸国のトップの末期（逆さ吊り、銃による自殺、絞首刑）を描いている点で、児童向けにしては過激なようにも思われるが、当時はこれが標準である。あるいは、虎の滑稽さ（と愛らしさ？）および上部に説明として付された韻文が、ことを軽くしているかもしれない。愛犬家で知られるヒトラーの脇に犬がぐったりして、傍らに毒薬と思しき瓶が転がっているあたり、芸が細かい。右側の文字は、上に触れた 1958 年の毛沢東の発言と、それに基づくこの紙面の「創作意図」が記されており、そこには現在の「張り子の虎」のトップがアメリカである旨が明記されている。図 13 はタイトル下の図版を拡大したものだが、額にはアメリカをあらわす「美」字がついている⁷。なおアメリカは代表としてマッカーサーが描かれるが、この時点で彼はすでに軍職を辞している。プラカードに「侵略戦争」と書かれ、片手片足の包帯は、朝鮮戦争で傷ついた兵士のイメージを重ねた「敗者」の印であるだろう。それはまた、虎の縞模様と相性の良い模様と言えるかもしれない。



図 13 図 12 の左中央部

もう一枚、1958 年 12 月の雑誌『漫画』の表紙に描かれた「紙老虎」画像も見ておこう (図 14)。紙の虎ということ、新年を祝う「1959」形の爆竹の火花により火がついてしまう、といった趣向である。虎の額には資本主義であることを表わす \$ マークが描かれ、腰には『投降学』⁸なる本を携えている。鼻の「A」は、形から原爆 (Atomic Bomb) のことだろう。中のアメリカ人は、やはりマッカーサーか。こちらも片手片足に包帯をしている。



図 14 『漫画』127 期 (1958.12.23) より

ちなみにこの翌年 1959 年の 1 月には『児童時代』上で「紙老虎現形記」という小説の連載が始まる (全 5 回)。文は^{でんよう}田邀、絵は^{ちようらくへい}張楽平による。これは章回小説の体を取るもので、詩句を交えながら、アメリカやイギリス、フランスといった資本主義陣営の劣悪さを糾弾している。張楽平の描いた紙老虎は、本誌第 7 号の拙稿⁹に掲載したものであるが、ここに再掲しよう (図 15)。

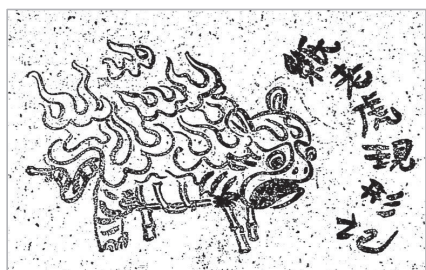


図 15 張楽平の描いた紙老虎
『児童時代』1959 年第 2 号 (1.16)

図 16 の二枚も、図 12 と同様、本誌第 7 号に載せたものである。いずれも『児童時代』からのもの。アメリカと虎の巧みな融合の例である。左は蔡振華「縛着它, 偽装的

闖入者」(偽装の闖入者を捕縛せよ)といい、右は^{たいとんほう}戴敦邦「南越打虎小英雄」(南ベトナム、虎退治の小さな英雄)という。虎に大統領の顔をはめこみ、縞模様を「US」にしているあたり、虎



図 16 『児童時代』表紙より

左: 285 期 (1962.4.16) / 右: 360 期 (1965.6.1)

とアメリカのシンプルな融合が見て取れる。左はケネディ（任期 1961.1-63.11）を、右はジョンソン（任期 1963.11-69.1）を描いている。右の 1965 年のものは、少女の帽子や肌の色、そして背景から、ベトナム戦争の影響がうかがえる。

虎を直接描かず、しかし上と同様の意図を有する図版も数多い。陳小兮^{ちんしょうけい}「帝国主義和一切反動派都是紙老虎」（帝国主義とすべての反動派はみな張り子の虎である、1965）は、毛沢東のことば以外に「虎」は描かれない（図 17）。敵がアメリカであることは、勳章をつけた中国人兵士が手にする銃剣に串刺しにされた軍用ヘルメットに「US」と記されていることから明白だ。その下にあるのは、国民党の青天白日旗か。下段の白いも



図 17 陳小兮「帝国主義和一切反動派都是紙老虎」

のは、ぼろぼろの日の丸。太陽に照らされた背面のぼやけた人々の中には、漢族以外の風貌の人が確認でき、中国以外の社会主義圏の国々との連帯と、その上での帝国主義に反対する、といった意図が汲み取れる。図 16 右などと考えあわせれば、あるいは「突き刺す」ことにも「虎」を連想させる意図があるのかもしれない¹⁰。

図 18 は雑誌『児童時代』（1966）からのもの。画面上部中央にいるのがベトナム人で、そのやや右下に配置されているのが、肩に「US」の文字から判断されるように、アメリカ人である。つまり、両者の舞台上での対立を、観客である中国の子どもたちが応援もしくは指弾しているといった図であるが、上に見てきたさまざまな図像と考え合わせたとき、これもまた「虎退治を描いたもの」と言える。



図 18 『児童時代』第 377 期（1966.4.16）表紙

そしてここに到り、再び『没頭脳和不高興』に登場する「武松打虎」について考える必要に迫られるのである。虎役の「不高興」は武松を追いかけてまわすことで、舞台をめちゃくちゃにするが、その混乱はすなわち、善悪を転倒させたことが原因なのである。それは当時の文脈に照らせば、お上への反逆にも似た所業と言える。かろうじて、児童向けであることが免罪符とはなっているが、虎が武松に勝つなんてことは、決してあってはならないのだ。善悪を転倒させた「不高興」は、腕を負傷し包帯を巻く（図 19）が、あの包帯は、善悪を



図 19 包帯をつけた「不高興」

転倒させた者への罰なのであって、それは虎すなわちアメリカが、上図において包帯とともに描かれていたことと響き合っている。

同じころの「虎退治」文芸ということで、^{かくしやうりん}霍松林『打虎的故事』（虎退治の物語、少年兒童出版社、1962）¹¹にも触れておきたい（図 20）。これは歴代筆記の中から虎退治の物語 18 種を選んで収めたもので、「前言」には、虎の伝統的イメージと虎退治の物語について、詳しく解説されている。物語はすべて現代語に書き直され、各物語の末尾には霍松林のコメントがある。前年の 1961 年に、^{かきほう}何其芳が 1958 年の毛沢東の「帝国主義と一切の反動派はみな張り子の虎であることを論ず」に啓発を受けて『不怕鬼的故事』（幽霊を恐れない物語）を編んでおり¹²、さらにそれを受けて「不怕虎」（虎を恐れない）の物語の編纂を思いついたとのこと。出版後は^{ぎきんし}魏金枝による称賛（『人民日報』所載「賛打虎英雄」）を受けたり、「前言」が『中国青年報』や『陝西日報』などに転載されたりなどして、各地で好意的な反応を受けるも、文革中は「打虎」が「打党」につながるとの理由で「毒草」とされてしまった¹³。

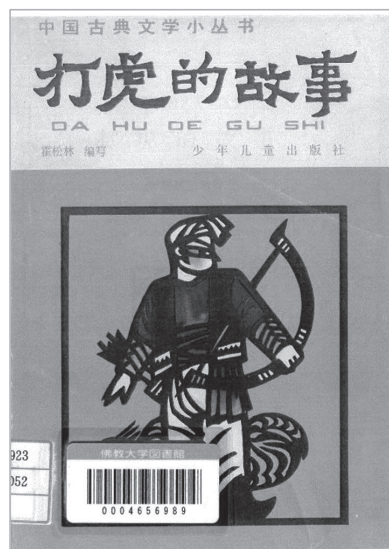


図 20 『打虎的故事』表紙

張り子の虎について

「紙老虎」ということばについても、少し丁寧に見ておこう。これは文字通り言うなら「紙の虎」であるが、一般に「張り子の虎」と訳される。日本語で「張り子の虎」といったとき、大きく二つの意味があるだろう。一つは、「首を振るもの」すなわち「イエスマン」のこと。この裏には、紙粘土などで作った、ゆっくり首を振る民芸品のイメージがある。もう一つは、「見掛け倒しのもの」すなわち「虚勢を張る人」のこと。これは木や竹の枠組みの上に紙を貼り重ねて作った虎の張りぼてをイメージしている。

中国で「紙老虎」と言えば、この二つ目の意味を指す。ではいつ頃から「見掛け倒し」を喩えるようになったか。この点については、すでに 1990 年代に議論があり、まず 20 世紀初め、^{ちんどうくしゅう}陳独秀や^{さいわしん}蔡和森、^{こてき}胡適などが帝国主義や国民党の喩えとして用いたことが話題に上り、のちにさらにさかのぼって、明代成立の『水滸伝』第 25 回や、それを踏まえた^{はんきんれん}『金瓶梅』第 5 回の例が提出された¹⁴。

ここで『水滸伝』の例を見てみよう。以下の引用中にある「女」は、稀代の^{はんきんれん}毒婦潘金蓮のこと。彼女は目下、愛人である^{せいもんけい}西門慶との密会現場を夫の^{ぶだい}武大に踏み込まれそうになっていて、急いで愛人の尻を叩いているところである。

女は戸を押さえながら、慌てふためきこう言った。「あんた、何にもないときゃ、イイ

カゲンなことばっか言って、腕っぶしが強いようでいながら、いざとなると役立たずなんだから！ 張り子の虎にビビってんじゃないわよ！」¹⁵（『水滸伝』第25回）

『水滸伝』から派生した『金瓶梅』では、潘金蓮こそが「美女の皮をかぶった猛虎」と明言されている（第1回）が、真の虎だからこそ偽の虎が見破れるということかもしれない。もっとも、紙で作った虎じたいは、もっと前からあったはずで、上はあくまで、それを「見かけ倒し」の意味で使った例の、文献上に見える最初、というに過ぎない。

そのほか、[清] 褚人獲の『堅瓠集』巻1には、以下のような興味深い例が見える。

世の中では囲碁を「木野狐」と呼ぶが、それは人の心を惑溺するからである。「紙老虎」と対にするべきで、それは紙牌もまた人の財産を損なうからである。¹⁶（『堅瓠十集』巻1「事物自然対」）

この項目は、対にするにふさわしいことがらを、さまざま並べ立てている。「木野狐」は木の狐をあらわし、囲碁をこのように呼ぶことについては、すでに[元] 無名氏『拊掌録』に記載がある¹⁷。紙牌は、いまのマージャンのように、一定の「役」を作るカードゲームであるが、賭け事に使われれば財産を食いつぶす可能性がある、といったあたりから、ここでは「紙老虎」（紙の虎）と呼ばれていると思しい。単なる紙の遊戯に見えて、そのくせ裏には虎のような危険が潜んでいることを、諧謔を含みながら伝える例といえよう。

そのほか、明清時期に流行した灯謎（なぞなぞ）を「謎虎」と呼ぶことがある。灯謎は元宵節などに、紙（もしくは灯籠の表面）に謎を記して人々に掲示し、謎を当てた者に賞品が与えられるといったたぐいの遊戯であるが、なぜ「虎」と名付けられたかについての理由としては、紙に墨で書かれた文字のさまが虎の模様に似ているから、といった解釈や、謎が難しく「手ごわい」から、といった解釈がある¹⁸。ここから灯謎を当てることを〈打虎〉と言ったりもする。これもまた紙で作られた「虎」の一種と言えるかもしれない。

虎の二つのイメージ

すでに述べたように、1962年の霍松林『打虎的故事』は、歴代の「虎退治」の物語のアンソロジーであるが、昔から虎は、とりわけ人々に意識され、多くの物語が紡がれ、図像が描かれてきた動物なのである¹⁹。これは中国において、虎が人間に身近な存在であったことを示している。例えば[宋] 李昉『太平広記』は、古代から宋初までの古小説1500近くを収めているが、そのうち動物類の中で、虎は龍の次（巻426-433）に項目が立てられ、80篇を採録している。[明] 王穉登『虎苑』、[明] 陳繼儒『虎薈』、[清] 趙彪詔『談虎』などの専門書も、虎に関する伝承を逐次蓄えていった。

虎がどういった存在だったか、といった観点から、中国のさまざまを眺めるとき、気をつけなければならないことがある。それは、虎が一貫して、「苛政は虎よりも猛し」（『礼記』

「檀弓」^{だんぐう}) のことばに代表されるような、人間に敵対する猛獣であった一方で、その強さが人にとっての理想でもあった、という点である。明代にまとめられた小説『三国演义』の「五虎大將軍」が、関羽ら五名の武将の勇猛さを称えた呼び名であることが、その証となるだろう。民間ではまた、虎は家屋を守る動物として版画などのモチーフにされ(蘇州「天師鎮宅」、^い濰縣「鎮宅神虎」など。図 21)、とくに子



図 21 鎮宅神虎 (年画、山東濰縣)

どもの健康を願う場面において、帽子や靴などにその意匠が用いられた。[清]顧禄^{こうろく せいかりく}『清嘉録』は、以下のように、端午節の子どもの装いに虎のモチーフが用いられたことを記している。

〔また〕錢を編んで虎頭の形とし、小児の胸前に懸けて猛を屈服させる意を示す。これを「老虎頭」という。また小児の着ける赤色の裙襴^{はらがけ}にも虎形を彩糸で刺繍する。これを「老虎肚兜」という。(『清嘉録』「五月」、中村喬訳、東洋文庫版 p.133)

虎のイメージは常に、倒すべきものと目指すべきもの、この二種が併存している。毛沢東の時代にもそれは同様なのだが、本稿でそのことはひとまず措き、以下、倒すべき害獣としての虎と、それに立ち向かう正義の側の人間、という図式のもののみを見ていく。

当世の武松

ここからは、具体的な連環画作品を見てゆこう。まず初めに取り上げるのは、連環画『今日的武松』(当世の武松、1954)である(図 22)²⁰。「内容紹介」によれば、これは 1953 年に福建省仙遊県^{せんゆう}で実際に起きた事件があり、それを記した野丁「英雄打虎」に基づいた改編とのこと。



図 22 『今日的武松』表紙

福建は仙遊の、象運郷なる村では、日中に虎が出没し、人や家畜を傷つけるため、人々は恐れて農作業にも出なくなった。1953 年 9 月のある日の午後のこと、六歳の子どもの虎に襲われてしまう。子どもの血は、サトウキビの林に続いている。人民解放軍の李富来^{りふらい}は、三名の民兵とともに銃を抱えて、虎の駆除のために林に分け入った。足跡から判断するに、虎は全部で三匹。討伐隊は二匹をターゲットにし、李富来は仲間と別れ、一人で虎を追って行った。

ふと、彼の前に前足を撃たれた虎が現れた。弾は仲間が撃ったものだった。李がとどめを刺すべく、虎の首元に一発撃ち込むと、虎は咆哮して高く飛び上がり、発狂したように林の中をのたうち回った。なぎ倒されるサトウキビ（図 23）。すかさず李富来、地面に銃を置いて、虎を背後から押さえつけ、ゲンコで力いっぱい殴った。虎の咆哮を聞きつけた民兵たちがやってくるころには、虎はぐったり、動かなくなっていた。



図 23 サトウキビをなぎ倒す虎（21 コマ）

民兵たちは虎を運び、李富来はまた一人、林の中を進んで行った。しばらくして、先ほどより一回り大きな虎が、地に伏しているのに出くわした。彼は十数歩の距離まで近づくと、銃をダダダと放った。首と胸に命中するがはいか、虎はひととび、空から斜めに向かってきた（図 24）。すかさず身をかわず李富来。



図 24 空から向かってきた（30 コマ）

向かいくる虎に、一発お見舞いしようとするも、すでに弾は打ち止めで、李富来は肩に両の前足をかけられて、押し倒されてしまう。必死で銃の柄と足を使い、相手を蹴り飛ばして形勢を整えると、倒れた虎の耳と腰とを押さえつけ、足で胸やら腹やらに蹴りを入れた。虎はなおも頭をもたげ、彼の足にかみついた。その痛みたるや、まるで十数本の釘が一度に刺さったかのよう。李富来は、虎の歯で穴だらけの左足をかばいつつ、両手で虎を押さえつけて、右足で蹴りを入れながら、ひたすらに叫んだ。「早く来て！」（図 25）



図 25 足を咬まれて絶体絶命（37 コマ）

李の声を聞きつけて、駆け付ける民兵、虎に一発放つと、李富来はようやく解放された。彼の足は冬瓜のように腫れあがり、大小数十の穴が開き、血がどくどくと流れている。天気は大荒れとなり、李富来は大雨の中、急ごしらえの担架で病院へ運ばれて行った。医者の適切な処置を受けるも、傷は深く、痛みのために夜も寝られないほ

どであった。二匹の虎を倒したことで、村には虎の害がなくなり、家畜は自由に草を食べることができるようになり、人々は農作業に精を出すことができるようになった。

中国では野生の虎が人間や家畜を襲う、といったことが、20世紀中ごろまで、よくあったようだ。この点、野生の虎がいない日本においては、やや考えにくい（日本の「出没注意」はもっぱら熊だ）。主人公の李富来は、虎に銃で立ち向かっていたはずなのに、いざ接近戦となると、銃はまるで役に立たず、最後には素手で押さえつけながらのパンチやらケリやらといった、泥臭い、血みどろの戦いを繰り広げることになる（図 26）。素朴なタッチのため、表情に乏しく、その過激さは主に文字からの情報ではあるが、その展開には思わずこちらにも手に汗を握ってしまう。

この物語は全 50 コマであるが、そのうち虎の搜索および戦いのさまに 30 コマもの長さがあてられている。背丈より高い、うっそうとしたサトウキビの林と、そのキビの茎の折れぐあい、閉塞した空間での激烈な戦いのさまを活写している。図 26 など、上に挙げた劉継卣のものに類似しているようでもあるが、図像的なつながりについては、より例を集める必要があるだろう。一つわからないのは、物語は二匹の駆除をもって、とりあえず「めでたしめでたし」としていること。もともと足跡は三四分あったのに！ 単なる「物語のほころび」かもしれないが、あるいは彼らにとって虎との戦いは、常に「to be continued」（次回へ続く）ということかもしれない。



図 26 虎にゲンコで立ち向かう（22 コマ）

娘さんが虎を追う話

少し後に現れた連環画『追虎記』（虎を追う^{はなし}記、1957。図 27）²¹は、王園愛^{おうえんあい}なる娘が、山中ひたすらに虎を追いかけるはなし。これもまた「まえがき」によれば、1956 年 4 月 28 日の夕暮れに起きた「事実」をもとにした物語という。

王園愛は小学校の頃から健康・学業・仕事に優秀な「三好学生」として知られ、17 歳になった今でも、年下の子どもの「お姉さん」であった。ある日、母親を手伝って食事の支度



図 27 『追虎記』表紙

をしていると、外で泣きわめく子どもたちの声が聞こえてきた。慌てて家を飛び出し、遠くを見やれば、なんと一匹の虎が、子どもの腰あたりをくわえて、山を登っているではないか。彼女は、エプロン姿のまま、一目散に追いかけた（図 28）。武器は道端の石ころのみ。ひたすらに大声を上げて追いかける。彼女はときおり虎に石ころを投げ、それらは虎の頭や尻にあたった。虎はときおり子どもを地面におろし、彼女の方を向いて威嚇した（図 29）。王園愛は虎を山の頂上まで追い詰めると、虎は逆に山を下って行った。慌てて王園愛も後を追った。

王園愛、ふと草に滑って、山道をゴロゴロと転げ落ちた。転げ落ちる彼女の服に、斜面の樹々がひっかかる。ドスンと地面に降りたそのとき、目の前にはあの虎が！ そこで彼女、も一つ体をゴロンと転がした。すると虎はびっくり仰天、子どもを置いて逃げ去ると、離れたところで王園愛を見つめた。王園愛もまた、立ちあがって石ころを手にとると、子どもを担いで虎を見つめた。さあこれからどうなるという時、村人たちが駆けつけた。

虎に連れ去られた子どもの腰には、大小 28 の歯の跡がついていたが、無事に治療を受けることができ、命の危険はなかった。のちに王園愛の武勇は全国に伝えられ、勇敢な「好姑娘」として称えられることになったのだった（図 30）。



図 28 エプロン姿で追いかける（14 コマ）



図 29 王園愛を威嚇する虎（27 コマ）



図 30 「武勇」を読む人々（51 コマ）

これは全 51 コマの連環画であり、12 コマ目で王園愛が虎を見つけてから 46 コマ目で村人が現れるまで、全体のほぼ三分の二が、ずっと「虎を追う」場面にあてられている。その間に描かれるのは、子どもをくわえて逃げ去る虎、石ころを持って追いかける王園愛、そしてぐったりした子ども、ばかりであるが、それらは退屈なものでは決してなく、背景に描かれた、足場が悪く起伏に富んだ山道や、立ちはだかる大小の岩々、はるか遠くに見える険しい山肌などが、単なる「虎を追う」場面を豊かなものになっている（図 31）。

「まえがき」には、以下のような、読者に対するメッセージが添えられている。

この話からは、次のことが見て取れるのです。虎は凶悪な野獣ではありますが、強いものを恐れ弱いものをいじめるものなのだということ。あなたがヤツを恐れれば恐れるほど、ヤツはあなたに害を及ぼします。あなたが勇敢に立ちあがりヤツと戦うのなら、ヤツはこそこそとあなたの元から逃げることでしょ。う。(表紙裏の「まえがき」)²²



図 31 道なき道を追いかける (23 コマ)

この文章は、表面的には虎退治のことのみに書かれているが、おそらく読み手は、より深く読みこむことを期待されている。ここには、みながこの娘のような勇敢さをそなえれば、必ずや立ちどころに凶悪さを退けられるだろう、といったことが述べられているのであって、つまりは、この娘の精神を自らの修養のヒントにせよといった「ガイド」なのである。この種の、単なる虎退治の物語を、一步引いたところから抽象化するような解説は、先に見た『今日の武松』にはなかったものだ。

この時期の「虎退治の物語」には、人や家畜が(食われたりして)実害を被るという、現実の「害悪」の解消を語るものと、目の前の敵に立ち向かえという、より抽象度を上げた「困難」の克服を語るものと、二つの極があるようだ。『水滸伝』の「武松の虎退治」が一方の極であるのなら、「武松」を模範とし、敵を「紙老虎」と呼ぶ毛沢東の発言や、それを敷衍させた霍松林のアンソロジーの登場などは、もう一方の極と言える。

そして当時において両者は、多かれ少なかれ、補完し合う関係となる。実際の単なる「虎退治の物語」も、その裏には武松の姿が透けていて、毛沢東のことばが響いている。人々は常に、ポスターや児童雑誌、アニメーションなどを通して、虎のみならず、現実の敵に立ち向かうことまでも、繰り返し要請されていたのだった。

雲南の虎退治の英雄

ここからは、ある実在の事件「^{ジャールオ}扎保打虎」(扎保の虎退治)を取り上げ、それを語る連環画を眺めてゆこう。これは1971年に、雲南省^{モウレン}孟連県で実際に起きた事件であり、報道記事が1972年の『人民日報』(5.25)に掲載され、連環画がいくつも作られた。新聞記事と連環画の内容から、その事件のあらましは、以下の通りとなる。

雲南省は孟連タイ族ラフ族ワ族自治県でのこと、ある日、生産大隊の民兵指導員である扎保は、虎が川辺の道で家畜を襲っていると通報を受ける。この地域では日ごろ虎の

害が多発していたから、扎傑はすぐさま、手には猟銃、腰にはナイフを携え、現場へと向かった。遠くには首を咬まれて死んでいる牛が見える。扎傑は虎が戻って来ることを見越し、一本の大樹に登って、戦いに備えて銃の準備をした。

ちょうどその時、五尺ほどの虎が牛のほうへ寄ってきた。扎傑は銃の狙いを定めると、一発放つ。ドンという音とともに、虎を仕留めた(図 32)。扎傑が木から飛び降り、虎のそばへ寄って仕留めたことを確認したとき、背後から狂風とともに別の一匹が草むらの中から、彼に向かって飛びかかって来たのである！ とっさに扎傑がよけると、虎が耳をかすめて地面に降り立った。扎傑は急いで腰の刀を抜いた。虎は身をひるがえし、大きくいななくと、また扎傑に向かってきた。扎傑は虎と距離を測りながら、ヤツの頭に刀をぶちかまそうとし、力いっぱい振り下ろした、その瞬間、刀は虎の頭をかすめ、ほんの薄皮を傷つけると、スポンと手から離れてしまう。



図 32 一匹目を銃で仕留める扎傑（『打虎記』より）

もう刀はないし、かといって銃に火をつける余裕はない。慌てて扎傑、そばにあった細い木をメリメリと折って武器とした(図 33)。頭を傷つけられた虎はより獰猛になり、扎傑にまた向かってきた。彼は身をかわすこともよけることもせず、急ごしらえの棍棒を、虎の額めがけて大きく振り下ろした。この一発が虎の額の骨を粉々にした。



図 33 木を折り棍棒を作る扎傑（『打虎記』より）

応援に駆け付けた人々は、彼がやつつけた二匹の虎を見て非常に喜び、彼を「打虎英雄」（虎退治の英雄）とほめそやしたのだった。

このはなし、見どころは二つあって、扎傑が武器をさまざまに使い分ける（銃、ナイフ、急ごしらえの棍棒）あたりと、一匹倒してほっとした直後にもう一匹が出てくるあたり。そういった展開は、倒したと思った敵が再び起き上がったかのようでもあり、連環画では、一つの画面に虎が二匹描かれたりなどして、なかなかスリリングである。そういえば『水

滄伝』にある「武松の虎退治」の場面も、一匹目を倒して精根尽き果てた武松の目の前に新たに二匹の虎が現れて、さあどうなる！ といった流れとなるが、実はそれらは、虎の皮をかぶって様子を見にやってきた村人たちなのであった。

この扎保は、この地域ではいまなお「英雄」として記録されている。現在の政協普洱市委員会 HP の「文史資料」の、「普洱英雄—民兵英雄」（プーアルの英雄、民兵の英雄）のコーナーの紹介は、以下のとおりである。

扎保、男、ラフ族、孟連県公信区糯東郷戈底寨の人。中国共産党党员。かつて生産小隊長や大隊党支部書記、民兵排長（小隊長）、指導員、教導員などの職を歴任した。1971年、集体の財産と人民の生命の安全を守るために、自身の危険を顧みず、自身の知恵と勇敢さでもって、三日のうちに二匹の虎をやっつけ、民のために害を除き、当地の人々から「当代武松」（当世の武松）、「打虎英雄」（虎退治の英雄）と称えられた。1974年、彼は雲南省の第三回民兵代表大会に出席し、省政府や省軍区は彼に一等功と、併せて「打虎英雄」の称号を与えた。²³

上に記したように、この物語は『人民日報』上で「扎保打虎」の名で報道された。「新華社通訊員」による1500字ほどの文章は小説体で、すでに読み物といった体をなしている。

ある日の夕方、一頻り降った小雨が止むと、山々は洗い流したかのごとく、一面、濃い緑となった。糯東大隊のラフ族の民兵指導員扎保が畑仕事から帰って来ると、ふと飼育員の石珠が汗だくになりながら、あちこち叫びまわっている。

「虎が牛を喰らいおった！」「虎が牛を喰らいおった！」

「どこでだい？」と扎保は慌てて尋ねた。

「海東河の五叉路のところだ。虎が隊の駄牛（運搬用の牛）に咬みつkiおったよ」

扎保は虎が隊の駄牛を喰ったと聞いて、怒りのあまり両の目からは火花が飛び出んばかりとなった。²⁴

これは平和な村に「虎出没」の知らせが飛び込んできたときの模様であるが、その場になかったはずの書き手が、まるでその場にいるかのような書きぶりである。会話体が多用され、風景描写にも富んでいる。事実のみならず臨場感までも伝えようと工夫しているかのようだ。

ジャールオ 扎保の連環画

これはなしは、のちに多くの連環画が作られた。手元にある五点を発行年代順に並べれば、以下の通りとなる。以降、便宜上、番号と出版社の省名（〇〇版）と呼ぶことにする。

- ①『扎倮打虎』（呂錫貞改編、張之杰絵画、山東人民出版社、1973.3）²⁵
- ②『扎倮打虎』（張子恩編絵、陝西人民出版社、1973.5）²⁶
- ③『打虎記』（常州市美術創作組集体創作、張德俊執筆、江蘇人民出版社、1973.7）²⁷
- ④『扎倮打虎』（王恩国改編、張有絵画、遼寧人民出版社、1973.8）²⁸
- ⑤『扎倮打虎』（黄云松絵画、李敬仕配詩、浙江人民出版社、1974.2）²⁹

サイズは、ほぼ「787×1092」の40開である。②の陝西版のみサイズが記されず、他より心持ち縦横が小さい。以下、図版を二枚ずつ上げる。一枚は表紙であり、もう一枚は比較のために、すべて「一匹倒した後にもう一匹を見つける場面」からのものである。

①の山東版（図34）は、一枚絵に七言絶句が添えられている。全18コマで、絵は白描画である。

②の陝西版（図35）は、絵本形式で全20コマのフルカラー。表紙の左側に黄と黒の縞模様を配し、中表紙に虎に剣を指すマーク（図36）を配するなど、デザイン面での趣向に富んだ一冊と言える。



図34 山東版『扎倮打虎』



図35 陝西版『扎倮打虎』

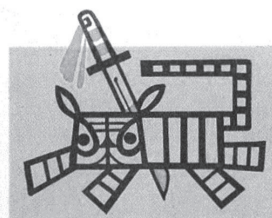


図36 陝西版・中表紙のマーク

③の江蘇版（図32、33、37）のみ、同じ物語を収めながらも、名称が『打虎記』となっていて、他と異なる。20ページの絵本形式で、フルカ



図37 江蘇版『打虎記』

ラー。特徴的なのは、多くの効果線によって、草が風によって波立つさまを描きこみ、場
に流れる空気を表現しているところ。虎と風は伝統的にも相性がいい³⁰。

④の遼寧版も、
絵本形式のフル
カラー（図 38）。
輪郭がはっきり
描かれている。

⑤の浙江版は、
一枚絵に散文詩
が配される連環
画形式である（図

39）。全 20 コマ。白黒
ではあるが、細かな線
が重ねられることで
銅版画のような陰影
がつけられ、立体的で
ある点が特徴的。

以上、五点の「扎保
打虎」物語を駆け足で
概観したが、形式が、

絵本のようなもの、挿絵をふんだんに用いた英雄叙事詩のようなもの、いわゆる連環画ら
しいものと、バリエーションに富んでいる。これだけ多くの版本がある背景には、物語の
舞台が雲南で、主人公が少数民族であった点が、漢族のエキゾチシズムを喚起したことも
関係するかもしれない。いずれも文革期に出版されたものであり、ところどころに毛沢東
のことばがゴシックで挿入されているが、それらを含めた詳細な分析は、別稿に譲ること
としよう。

その後の武松たち

文革の後にしばらくして生まれた 1982 年のアニ
メーションに『假如我是武松』（もし僕が武松なら、
人形アニメ、詹同監督）がある（図 40）。冒頭に挙
げた『沒頭腦和不高興』から、ちょうど 20 年後の
作品ということになる。主人公は武松ならぬ宋武
なる小学五年生の男の子。彼は夢の中で、かつて武
松に倒された虎の子どもと対決をする。対決とい
っても子どもだから、^{はねけり} 踢毽子や^{かくれんぼ} 捉迷藏や知力勝負



図 38 遼寧版『扎保打虎』



図 39 浙江版『扎保打虎』



図 40 アニメーション『假如我是武松』

などが催されることになる。登場するキャラクターが丸っこくて愛らしく、人形アニメ特有のカタカタした楽しい動きもあいまって、まさに経典と呼ぶにふさわしい作品と言えるが、本稿に関連するのは、その冒頭である。

宋武と彼の妹は、テレビで「武松打虎」の講談を聞いている。「……武松は酒屋でたらふく飲んだ酒がきいてきて、ちょっくら一休みと、大きな岩の上で居眠りを始めると、どこからともなく吹いてきた一陣の風とともに、大きな虎が飛び出してきて……。」

さあいよいよ、というところで、宋武はチャンネルを変える。妹が不満げに「何すんのよ、あたし見たいのに」と言うと、彼はうんざりしたようすでこう言い放つのだ。

「それが何だよ、わかってるよ。それから虎は武松にやられちゃうんだ。」

つまり宋武はこのはなしに飽き飽きしているのだが、このひねくれたつぶやきは、ひょっとしたら、むかし「虎退治の物語」をさんざんに聞かされた、作り手たちの本音であったのかもしれない。そして同時に、1980年代にはこのようなニヒルさが許容されたということを示してもいよう。

2021年現在、建国から70年を経て、経済的にも軍事的にも力を蓄えた中国は、建国当初とは少し違った意味合いで、いままアメリカと張り合っている。「紙老虎」ということばもまた、SNSなどでは、いままアメリカを揶揄するものとして健在のようだ。

一方、それとは別に国内では、いまま「虎退治」が行なわれている。習近平主席は、2013年ころから、腐敗した官僚を虎や蠅に喩え、それらの撲滅を訴えており、はじめは直接、周永康や薄熙来などを指していたが、彼らの失脚の後も、虎は絶えることなく増え続け（正確には「虎にされてしまう」のだが）、その撲滅のさまは「打虎戦績」なる見出しで報道される。習近平も当世の武松の一人なのであった。

中国大陆では野生の虎が、どんどん少なくなっているという。しかしかの国から「虎」がいなくなることはないだろう。ならば武松もまたしかり。百獣の王たる虎のパワーに魅せられた人々が、あるものは武松になり、あるものは虎になり、虎にされ、ときに張り子だとからかわれながら、熾烈な闘争を繰り広げてゆくに違いない。「武松の虎退治」の物語は、21世紀に至ってもなお、単なる昔の英雄譚などではありえず、それはいつでも現実に還元しうる、極めて地に足の着いたものなのである。

- ¹ 『没頭悩和不高興』については、孫立軍主編『中国动画史研究』（商務印書館、2011）pp.80-81、小野耕世『中国のアニメーション』（平凡社、1987）pp.114-117 参照。
- ² このアニメーションの「同じ顔」については、かつて文章を書いたことがある。拙稿「“同じ顔”の子どもたち——アニメ『葫蘆兄弟』を端緒として」（『大朋友』第1号、中国児童雑誌研究会、2017.3、pp.23-38）参照。
- ³ 劉継卣『武松打虎』（人民美術出版社、1957）所収の秦嶺云「前言」（1956）参照。
- ⁴ 原作の『水滸伝』では、虎退治は夕暮れどきのことであり、月の描写もない。1980年代に同題材で「新年画」が描かれてゆくが、筆者の見た二枚（陸克勤編著『新年画図録：中国年の回憶』、上海書店出版社、2008 所収。宋徳風 1980、房英魁 1981）は、いずれも虎退治が夜に行なわれたこととして描かれ、黄色い月に照らされていた。近年の画家である王可偉（1950-）もまた、上空に月を配している（彼の Facebook「王可偉油画」など参照）。揚州評話「武松打虎」の記録を翻訳した立間祥介編訳『中国講談選』（平凡社東洋文庫、1969）には「早や皓々たる月がのぼり、あたり一面昼のよう」とあり（p.73）、語り物ではよくある設定だったのかもしれない。月の登場は、「武松打虎」の場面に過度の陰影をまとい、よりドラマチックに見せることに寄与していると言えるだろう。
- ⁵ 原文は以下の通り。「一切反动派都是紙老虎。看起来，反动派的样子是可怕的，但是实际上并没有什么了不起的力量。从长远的观点看问题，真正强大的力量不是属于反动派，而是属于人民。」ちなみにこの会見をモチーフとして、画家の李醒韜と梁照堂が油絵『笑談紙老虎——毛沢東与安娜·路易斯·斯特朗』（1973）を残している。
- ⁶ 原文は以下の通り。「从本质上看，从长期上看，从战略上看，必须如实地把帝国主义和一切反动派，都看成纸老虎。从这点上，建立我们的战略思想。」なお毛沢東は、ほぼ一年前の 1957 年 11 月 18 日「各国共産党・労働者党のモスクワ会議における講話」においても、ヒトラーやツァー、中国の皇帝、日本帝国主義などを「張り子の虎」に喩えている。竹内実訳『毛沢東語録』（平凡社、平凡社ライブラリー、1995）pp.94-100「六 帝国主義とすべての反动派はハリコの虎である」参照。
- ⁷ 伝統的には虎の額には「王」字をつけることが多い。図 21 参照。
- ⁸ 「投降学」は、夏衍「紙老虎在研究“投降学”」（『紅旗』1958 年第 7 期、pp.39-41、1958.9.1）によれば、アメリカの退役軍人が新聞に発表した文章に端を発した、もし核戦争が起こったらどのように投降したらよいかといった議論であり、具体的には後に「ランド研究所」（アメリカのシンクタンク）が書いた一編の論文を指している。この論文は 1958 年にスタンフォード大学出版社から出版された『勝利と失敗の政治』に収録されたといい、これはポール・ケスケメティ（Paul Kecskemeti）の著作『Strategic Surrender: The Politics of Victory and Defeat』と思しい。
- ⁹ 拙稿「新中国の三毛——『三毛翻身記』（1951）を読む」（『連環画研究』第 7 号、pp.87-109、2018.3）。
- ¹⁰ 「武松打虎」にならんで有名な虎退治の物語に「卞莊刺虎」があり、これは秦の恵王に遊説する楚の使者である陳軫の話の中に登場する。春秋の魯の大夫である卞莊は、一匹の牛を狙う二虎を見て、両者を互いに闘わせ、大きい虎が傷つき小さい虎が死ぬのを待って、大きい虎を刺し殺して二虎を獲たのであった（以上、司馬遷『史記』巻 70「張儀列伝第十」）。いま「卞莊刺虎」といえば、一挙兩得をいう。「刺虎」の有名な図に、清代の宮廷画家であるカスティリオーネ（郎世寧）の「乾隆皇帝刺虎図」（北京故宮博物院所蔵）があり、これは槍を持った乾隆帝が虎に対峙する図像である。
- ¹¹ 霍松林編写『打虎的故事』（少年兒童出版社、1962）。図は林曦明による。本稿では 1979 年の重版版を用いた。
- ¹² 『不怕鬼的故事』および関連の運動については、名和又介「「鬼を恐れない」運動」（『言語文化』第 9 巻第 4 号、pp.671-696、同志社大学言語文化学会、2007.3）参照。
- ¹³ 前掲『打虎的故事』所収「重版後記」参照。
- ¹⁴ 鮑延毅『金瓶梅語詞源』（華夏出版社、1996）pp.9-10 参照。これによれば『水滸伝』に見える例が最古のものであると指摘したのは、梁佛根「“紙老虎”一詞至遲見於明代」（『文摘報』1991.6.27）という。

- 15 原文は以下の通り。「那婦人頂住着門，慌做一團，口裏便說道：“閑常時只如鳥嘴，賣弄殺好拳棒。急上場時便沒些用。見個紙虎，也嚇一跤。”」1975 年の人民文学出版社版を使用し、簡体字は、適宜、繁体字に改めた。
- 16 原文は以下の通り。「世號棋為木野狐。以其媚溺人心。可對紙老虎。亦以紙牌能耗人財也。」『堅瓠集』は清代筆記叢刊（齊魯書社、2001）所収のものを使用した。該当箇所は巻 2、p.1180。
- 17 ちなみにこの引用の直後には、かつて国の専売品で私売が厳しく禁じられていた茶葉を「草大虫」と呼んでいたことが記されて、対になるものとして「火花娘」（煉丹）が挙げられている。「大虫」は虎のこと。元代『拊掌錄』では、この「草大虫」が「木野狐」と対にされ、人を損なう可能性のあるものとして挙げられている。
- 18 謎虎ということばについては、蘇才果「虎虎有生氣——虎年說「虎」謎」（陳振鵬主編『謎話』、上海古籍出版社、2003、pp.120-121）など参照。
- 19 虎に関する物語に言及する書籍や論文はさまざまあるが、本稿では汪玢玲『中国虎文化』（中華書局、2007）と北條勝貴「山と森の文化史——山林にて、虎と遭う」（ハルオ・シラネ編『東アジアの自然観——東アジアの環境と風俗』pp.39-63、文学通信、2021）を参照した。
- 20 『今日の武松』（黄一徳・金奎合作、新美術出版社、1954）。国会図書館関西館所蔵のものを使用。
- 21 『追虎記』（雨萃改編、呉懋祥絵者、王弋文字編集、阮恩沢図画編集、河北人民美術出版社、1957）参照。
- 22 原文は以下の通り。「从这故事里，可以看到：老虎虽是凶恶的野兽，但它是欺弱怕强的。你越怕它，它越欺负你；你要挺身和它战斗，它就躲着你跑。」
- 23 原文は以下の通り。「扎保，男，拉祜族，孟连县公信区糯东乡戈底寨人，中共党员。曾先后担任生产小队长，大队党支部书记，民兵排长，指导员，教导员等职务。1971 年，为保护集体财产和人民生命安全，他不顾个人安危，凭借个人的智慧与勇敢，三天之内消灭两只恶虎，为民除害，被当地群众称为“当代武松”、“打虎英雄”。1974 年，他出席云南省第三届民兵代表大会，省政府、省军区给他记一等功一次，并授予“打虎英雄”称号。」政協普洱市委員會の HP (<https://www.pzx.gov.cn/show.php?id=5325>) 参照。（アクセス最終日：2020 年 11 月 29 日）
- 24 『人民日報』（1972.5.25）より。原文は以下の通り。「/」は改行を示す。「一天傍晚，一场小雨刚过，千山如洗，一片苍翠。糯东大队的拉祜族民兵指导员扎保刚从地里劳动回来，只见饲养员石珠满脸汗水，边跑边喊：“老虎吃牛了！”“老虎吃牛了！”/“在那？”扎保急问。/“在海东河边五叉路口，老虎咬死了队里的一头驮牛。”饲养员说。/扎保一听老虎吃了队里的驮牛，顿时气得两眼直冒火花。」
- 25 初版 22 万部、0.05 元。
- 26 冒頭に「根据 1972 年 5 月 25 日《人民日报》同名通讯改编」の記載あり。初版 45 万部、0.12 元。
- 27 冒頭に「根据《人民日报》通讯《扎保打虎》改编」の記載あり。0.10 元。
- 28 初版 10 万部、0.15 元。
- 29 冒頭に「根据《解放日报》同名文章编绘」の記載あり。ほかに「戦馬馳騁」の物語（黄云松絵画、何宏・李敬仕配詩。郭戈の同名小説より）を収める。初版 10 万部、0.08 元。
- 30 虎と風の相性については、古くは『周易』に「雲は龍にともない、風は虎にともなう」（乾卦「文言伝」）のことばがある。『水滸伝』第 23 回の「武松の虎退治」の場面でも、虎は風とともに現れる。